

視 座

艮陵令和会

宮城県医師会常任理事

石 井 正

東北大学医学部・医学系研究科・東北大学病院およびその関連病院は1963年に三者協議会（「三者」とは、学生会、研修病院会、大学（教授会・教室員会）の3つを表す）を組織し、1993年からは艮陵協議会にその機能を移して独自に卒後臨床研修システムを構築しながら人材育成と人事交流を行ってきた。すなわち、艮陵協議会は東北大学病院・医学部・医学系研究科とその関連病院との橋渡し役を担い、卒業生を関連病院で初期臨床研修させ大学の医局に戻すという若手医師育成の循環システムを効率よく運営し、また指導医レベルの派遣や病院長の人事においても艮陵協議会会員病院と東北大学は密接な連携をとってきた。東北大学医学部の学生教育や臨床実習、東北大学病院と関連病院の初期臨床研修・専門研修プログラムの支援、学生に対する関連病院への初期臨床研修の勧誘も行ってきた。ところが、2004年の初期臨床研修制度開始以降、同制度が必修化される前に比べ東北大学の卒業生が本学へ帰学する割合が減少してきていることが2018年に明らかになった。例えば1989年度卒業生は最終的に117名中114名が帰学し、その帰学率は91.4%であったが、2017年度卒業生107名のうち、艮陵協議会加盟病院以外の病院への初期臨床研修を選択した卒業生は32名、30.0%にも及び、同年度の入局者139名のうち本学出身者はわずか50名、36.0%であった。また2013年度から2017年度までの5年間の本学以外の卒業生を含めた入局者の前所属病院データを解析したところ、艮陵協議会に加盟している「基幹型初期臨床研修病院」61施設のうち、本学へ送り出す医師数が毎年1名未満の病院は2/3に迫る60.7%、37施設あり、しかもおよそ1/4にあたる26.2%、16施設からは、5年間で一人の医師も本学へ入局していない、という衝撃的なデータが出た。すなわち、かつては艮陵協議会をダイナモとしてうまく機能していた「医師育成循環システム」が、初期臨床研修制度導入後、「out」も「in」も徐々に機能しなくなっていることが示されたのである。これには初期臨床研修制度必修化や日本専門医機構による新たな専門医制度開始の他にもさまざまな要因が考えられる。たとえば本学医学部の入学者について言えば、50年前は入学者の約6割が東北地方出身者であったが、入試制度改革により全国一律の制度が導入されてから東北出身者の割合は漸減し、2010年度から2019年（令和元）度までの10年間の入学者の内訳をみると、東北地方出身が37.5%、関東出身が34.4%（東京出身：20.3%）、その他が28.1%と、東北地方出身者の割合が半減するかわりに首都圏出身者が増加するなど全国から入学するようになってきている。また社会的にも地方の人口減少と少子高齢化が急激に進んだことで都会と地方の格差が一段と開き、

若者にとって地方の魅力が次第に薄れ若者の東京一極集中がさらに加速していることもその要因の一つとして考えられる。一方で、一県一医大構想で設置された各大学医学部が新設医大という名称を名実ともに脱却し、人的にも設備・施設面でも充実しながら各県の主要な病院の人事を握り始めた。それにより、従来は東北大学の関連病院であった複数の病院が次第に東北大学を離れていったことも大きいと思われる。

このような危機感から東北大学病院では、2018年1月から3回にわたり、東北大学のほぼすべての診療科長・臨床系教授が参加する『東北地方の地域医療を考える懇談会』を学内で開催した。その結果、現状認識として以下の内容が共有された。①大事な教育関連病院をこれ以上失うことは卒業生の帰学率をさらに下げるリスクが大きい。

②関連病院との精神論的な関係性だけで関連病院を維持するのはもはや困難である。③艮陵協議会はNPO法人なので原則として入会希望者（施設）は誰でも（どの施設でも）入会できるため、東北大学の医学生や若手医師の教育研修について、艮陵協議会の仕組みだけでは理念を一つにした本学と関連病院との強固な連携体制を構築維持することは難しいのではないかと。

最終的に今後の対応策として、第一に、各診療科が特に関連病院人事においてバラバラに動くのではなく、東北大学病院・医学部・医学系研究科が一体感をもって足並みをそろえるような仕組みを作るべきである、第二に、他大学のやり方を調査し、それを参考に対応策を考えるべきである、第三に、これ以上関連病院が東北大学から離れないよう、関連病院との結びつきをより深め、包括的に地域医療をマネジメントすることで東北大ブランドが打ちだせるような魅力あるキャリアパスを再構築する、との意見集約がなされた。

このような議論の中で、「重点教育関連施設」を複数認定し、これら施設と東北大学病院・医学部・医学系研究科の全臨床医学系教授が参加する場を設置し、地域医療や東北大学卒業生の動向、入局者の傾向などの情報を東北大学・関連病院間で共有し、また今後の地域医療や卒業生のキャリア形成等の在り方について協議していくことになった。そこで各診療科に対し「重点教育関連施設」として考えている病院を複数回答してもらうアンケート調査を実施し、回答数上位の病院を中心に「重点教育関連施設」として認定し、これらの施設長（病院長）および東北大学病院・医学部・医学系研究科の全臨床医学系教授が参加する「艮陵令和会」を2019年6月13日に新たに設置した。会の目的については、第一に会員病院及び東北大学間の連携を密にして人事交流の円滑化を図り、相互の医療レベルを発展させるための協議を行う、第二に、会員病院、東北大学病院／医学部における学生臨床実習など、東北大学医学部学生の卒前教育のより一層の交流及び充実を図る、第三に、会員病院、東北大学病院／医学部における初期臨床研修や専門研修などの卒後教育のより一層の交流及び充実を図る、第四に、会員病院、東北大学病院／医学部相互の親睦を深め、新時代に即応した情報の交換を行う、第五に、東北大学艮陵同窓会及び艮陵協議会と連携し、東北大学病院／医学部の医学・医療の向上に必要な事業を行う、こととした。すなわち艮陵令和会は東北大学病院／医学部と関連病院との間で、卒前教育から初期研修・専門医研修、さらには指導医クラスの人事交流までを包括的に検討する組織体として位置づけられる。2022年7月現在まで、すでに5回会議が開催され、毎年の本学卒業生の進路や入局者の情報を共有しながら、艮陵協議会や新設された東北医科薬科大学、医師会、さらには宮城県をはじめとする関連自治体との様々な調整のハブとして活動している。これらの活動を通じて地域医療を守る体制がより強固となることが期待される。

